

## —追 悼—

## 本田実さんの逝去を悼む

古 在 由 秀\*

多くの彗星や新星を発見されるなど、天文学に多大の貢献をされた本田実さんが、8月26日に急逝された。まだ77歳であっただけに、本田さんが亡くなられたことは残念でならない。

本田実さんの名前は、特に我々の年代の者にとっては特別の響きを持つ。第二次世界大戦後の日本には、暗いニュースしかなかった。何時も空腹で、将来に夢を抱くことは非常に難しかった。その時代の明るいニュースといえば、湯川秀樹先生のノーベル物理学賞受賞と、水泳の古橋広之進選手が泳ぐたびにだす世界新記録であった。これが天文の世界では本田実さんの新彗星の発見である。私より少し下の世代で、中学生の時本田さんに「しっかりやりたまえ」と肩をたたかれた時に感じた温もりがまだ残っているので、この仕事はやめられないと言っている方もおられる。戦後の日本の天文学は、先ず本田さんの仕事で世界に知られるようになったのである。

本田さんの彗星や新星の発見の記録は、天文月報83巻8号の香西洋樹氏の記事を見てもらいたい。本田さんは12の彗星と11の新星を見つけておられる。その表のなかで、1940年から1955年までは、彗星の岡林さんと1942年の新星を除いては、本田さんの名前だけが7回も現れる。その後、本田さんに刺激されて彗星捜索を始めた関勉さんと池谷薫さんの活躍があり、それがまた次の世代の人に受け継がれて、今日の隆盛へとつながるのである。

本田さんは、1940年の10月と1941年の1月に彗星を発見され、その後軍隊に入り、中国の東北地区に行かれた。あの規則の厳しかった日本の軍隊で、本田さんは兵隊の背負う背嚢に単眼鏡を付けておられたと言う。それで中国でみた星空のすばらしさを語られたのを伺ったことがある。それからシンガポールに移られ、そこでイギリス軍の残した車のなかで、レンズを見つけられ、望遠鏡を作って彗星を発見された。この知らせは日本に伝えられ、それで家族に本田さんがシンガポールにいることも知らせられたと思われたという。ところが、この彗星は外国で既に発見されていたもので、残念ながら本田さんの発見とは認められなかった。

よく知られているように、本田さんは特別な教育を受けられた方ではない。学校には14歳までしか行っておられない。それでも、子供の頃から天文に興味を持ち、



望遠鏡を手に入れ、天体観測をしておられた。初期の指導者は東亜天文学会を創設された山本一清先生であり、後に倉敷の実業家の原澄二さんや大原総一郎さんがよく面倒をみられて、望遠鏡なども提供された。その後夜は忙しいが昼は暇だろうと、幼稚園の園長の職も大原さんの要請で努められながら、天文観測も続けられた。

本職の天文学者も本田さんには随分恩恵をおこむっている。東京天文台では、先ず下保茂さんが戦後すぐの頃、変光星の観測で梅雨の影響の比較的小さい岡山地方に小さな望遠鏡を置かれた時も、本田さんのお世話になった。現在の岡山天体物理観測所が創立される時も、当時の岡山県知事とともに本田さんのご尽力が大きかった。本田さんのお陰で、いろいろの交渉事がうまくいく場合も多かった。岡山観測所にとって、あるいは国立天文台にとって本田さんは恩人の一人である。

本田さんは晩年、二台のカメラに望遠レンズをつけ、同じ星夜に向けて写真を撮り、新星の発見にとりくんでおられた。その間、二つのカメラに写った天体の像が、次の露出時にはなくなるということが三回あった。本田さん自身はこれが天体であることに自信を持っておられたが、国際天文学連合の天文電報局の認めるところとはならず、私が Sky and Telescope 誌にこの事実を投稿して事実を書きとどめたことがある。

本田さんのこのような活躍は世間に認められ、吉川英治賞(1985年)、紫綬褒賞(1963年)、フランス天文学会の創立100周年記念賞(1987年)を贈られ、倉敷市の名誉市民にも推挙された。しかしこのような榮譽を受けられても奢ったところはなく、何時も温顔を絶やさない心優しい、温厚な方であった。まだまだ活躍が期待されていただけに、お亡くなりになったことは非常に残念である。ご冥福をお祈りするのみである。

\* 国立天文台 Yoshihide Kozai